

自分のからだをもって神の栄光をあらわせ

「みだらな行ないを避けなさい。・・・（あなたがたは）知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい」と使徒パウロはコリントの教会のキリスト者たちに勧告する（6：19～20）。

これはキリスト者の自由をはきちがえて「性的行為の自由」ととなえ、みだらな行ない（不品行）を正当化しようとする、当時のコリント教会に入り込んでいた或る人々の誤った主張に対するパウロの戒めの言葉であるが、使徒はここで3つの大切なことを語る。

第1は、私たちキリスト者が現在置かれている栄光の状態である。私たちのからだは「聖霊が宿ってくださる神殿」と呼ばれている。第2は、キリスト者がこの栄誉あるものとされるために払われた高価な代価である。すなわちキリストの十字架の贖いの死という代価である。第3に、キリスト者のこの世における使命の大きさと尊さである。即ち全存在をもって神の栄光を現すという尊い使命である。

ここには使徒パウロの崇高な「からだ」観が教えられている。キリスト者にとって「からだ」とは、単に「肢体の集まり」「肉の固まり」ではなく、「私という存在／人格」に不可欠なものであり「私という存在そのもの」である（ローマ12：1参照）。キリストはからだを離れた「わたし」ではなくからだを含めた「わたし」そのものを十字架をもって贖われたのである。

したがって、キリスト者は、単に「魂のきよさ」だけでなく、この「からだのきよさ」をも保ちつつ生きるよう求められている。このからだは、キリストの栄光の体の一部であることを覚えて(6:15)、このからだを道徳的に正しく管理していかなければならないとパウロは言う。特にキリスト者は、性を聖とすべきである。結婚している者は夫婦という関係の中で、このからだを正しく管理すべきであり、また配偶者を持たない未婚の人は、神がふさわしい配偶者を与えられるまで自分のからだを正しく純潔に保つべきである。

今日は性の紊乱（びらん）した時代である。新聞広告からテレビ、映画雑誌、週刊誌、インターネットに至るまで人の欲望をかきたてるようなもので満ちている。茶の間から職場の交わりに至るまでそういうもので満ちている。そういう時代であればこそ、キリスト者は、その信仰と生活において神の御前に清さを保ち、性を聖とし、このからだをもって、神の栄光をあらわしていくべきであると言う。極めて崇高で深い倫理的教えである。

別の箇所ではパウロが次のように語っていることも心に留めたいと思う。「神のみこころは、あなたがたが清くなることである。すなわち、不品行を慎み、各自、気をつけて自分のからだを清く尊く保ち、神を知らない異邦人のように欲情をほしいままにせず、また、このようなことで兄弟を踏みつけたり、だましたりしてはならない。前にもあなた方にきびしく警告しておいたように、主はこれらすべてのことについて、報いをなさるからである。神が私たちを召されたのは、汚れたことをするためではなく、清くなるためである」（第1テサロニケ4：3～7／口語訳）。